

タイトル	ユダヤ教の起源と発展を求めて - アブラハム・ガイガーのユダヤ学 -
著者	佐藤, 貴史; SATO, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(76): 29-45
発行日	2024-03-31

# ユダヤ教の起源と発展を求めて — アブラハム・ガイガーのユダヤ学<sup>1</sup> —

佐藤 貴 史

はじめに

## 1. ユダヤ学を定義すること — 研究史としての思想史

### (1) 1818年のユダヤ学, 100年後のユダヤ学

— イスマール・エルボーゲンの回想

### (2) 狭すぎるユダヤ学? — ガイガー研究の現状

## 2. ガイガーにおけるユダヤ学の構想 — 歴史と形而上学

### (1) ユダヤ学の目的, 区分, 定義 — 「精神的生」の理解

### (2) ユダヤ学における歴史の意味 — 起源と発展

おわりに — ユダヤ学の複数性

はじめに

本論文の目的は19世紀ドイツに誕生したユダヤ学 (Wissenschaft des Judentums) を, 改革派ユダヤ教の指導者アブラハム・ガイガー (Abraham Geiger, 1810-1874) の思想に基づいて考察することである。簡潔に述べれば, ユダヤ学とは〈ユダヤ教を主に歴史批判的方法に基づいて研究しよう

---

<sup>1</sup> 本論文は宗教哲学会第15回学術大会 (於: 京都大学, 2023年3月25日) で  
の発表に, タイトルも含め若干の加筆修正を施したものである。なお学術  
大会で行った発表の要旨は『宗教哲学研究』第41号 (宗教哲学会, 2024年  
3月) に掲載されることになっており, 分量はかなり異なるものの, 内容に  
おいて本論文と一部重複することをあらかじめ断っておきたい。

とした学問<sup>2</sup>である。本論文で取り上げるガイガーはユダヤ教研究に歴史批判的方法を導入することで、近代世界にふさわしい仕方でユダヤ教の意義をキリスト教世界に向けて述べ、同時にキリスト教に内在する反ユダヤ主義的偏見を学問的に厳しく批判しようとした——その試みが成功したかどうかは別の問題である——ユダヤ学者だと言えよう。

本論文は、ガイガーが構想したユダヤ学の内実には焦点を当てることで、歴史批判的方法に基づいた彼のユダヤ学は、ある種の形而上学的思想と密接な関係にあることを最終的に指摘したい。この目的を達成するために、本論文は大きく見て2つの部分から構成されている。第一に、日本ではいまだ未開拓の領域であるユダヤ学の研究状況をガイガーの思想との関係のなかで整理することで、本論文の研究史的な位置づけを明確にする。第二に、ガイガーのユダヤ学の構想について概観したうえで、彼のユダヤ学はユダヤ民族の「精神的生」をユダヤ教の歴史のなかから取り出そうとしており、ここに彼のユダヤ学ならびにユダヤ教理解がユダヤ教の歴史批判的研究にはおさまりに切れない形而上学的特質をもっていることを指摘する。

先に述べたように、日本におけるユダヤ学研究は諸外国と比べて大きく遅れていることも鑑みて、本論文は研究史＝思想史という視点にしたがってガイガーのユダヤ学を分析する。したがって、本論文の前半部分を構成

<sup>2</sup> ここではとりあえずこのように定義をしたが、後に述べるようにユダヤ学の定義それ自体がユダヤ学の成立を左右する根本問題である。ちなみに2人の著名なユダヤ学研究者はそれぞれ次のようにユダヤ学を特徴づけている。ユダヤ学は「ユダヤ人の学問を非歴史的な仕方でのテキストの詳説から、そのさまざまな要素を起源や発展のコンテクストへと配置するような歴史的研究へと変えた」(Michael A. Meyer)。また、ユダヤ学がもたらした結果は「批判的学問に基づいた歴史への転回」(Ismar Schorsch)である。Michael A. Meyer/ Ismar Schorsch, “Zunz and Steinschneider Would Be Astonished and Reassured: Two Senior Scholars of Wissenschaft Reflect on Its 200<sup>th</sup> Anniversary,” *Zeitschrift der Vereinigung für Jüdische Studien* (2018), Heft 24, 20.

する研究史に関してもそれ相応の紙幅を割いている。なお、研究史＝思想史という視点については注 24 も参照してほしい。

## 1. ユダヤ学を定義すること — 研究史としての思想史

### (1) 1818 年のユダヤ学, 100 年後のユダヤ学

#### — イスマール・エルボーゲンの回想

ある学問がどの時点で誕生したかは、何によって確かめることができるのか。このような試み自体が無意味な作業であると考えられる一方で、ユダヤ学に関してはいくつかの年号とともにその誕生と刷新について語られてきた。

ユダヤ学の誕生をもっともはやく見る立場は、1818 年を重要な年として強調する。この年は、若きレオポルト・ツンツ (Leopold Zunz, 1794-1886) が、「ラビ文学についてのこと」(Etwas über die rabbinische Literatur) を出版した年である。ユダヤ学の創始者とみなされるツンツは、ベルリン大学でフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフやアウグスト・ベークの古典文献学から大きな影響を受けたことが知られている。彼の「ラビ文学についてのこと」のなかでは「ユダヤ学」という言葉は用いられないものの、ユダヤ教を歴史批判的に研究しようとする、のちのユダヤ学の学問的性格がすでに現れているという<sup>3</sup>。

1818 年とは別に、ツンツやエドゥアルト・ガンス (Eduard Gans, 1797-1839) などが中心となり、そしてのちにハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856) も関わることになる「ユダヤ人文化学術協会」(Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden) がベルリンに創設された 1819 年、あ

---

<sup>3</sup> のちに言及するイスマール・エルボーゲンのテキストを参照されたい。ツンツに関しては次の研究もきわめて重要である。Ismar Schorsch, *From Text to Context: The Turn to History in Modern Judaism* (Hanover: Brandeis University Press, 1994).

るいはこの協会の学術雑誌である『ユダヤ学雑誌』(Zeitschrift für die Wissenschaft des Judenthums)が出版され、さらにはそこにイマヌエル・ヴォルフ(Immanuel Wolf, 1799-1847)の記念碑的論文「ユダヤ学の概念について」(Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums)が掲載された1822年を重視する者もいるだろう。ユダヤ学の成立年をめぐる問題にこれ以上踏み込むことはしないが、ここでは1922年に書かれたイスマール・エルボーゲン<sup>4</sup>(Ismar Elbogen, 1874-1943)による回顧的エッセイを参照しながら、ユダヤ学の100年について概観し、問題の所在を確認してみたい。

エルボーゲンによれば、「ユダヤ学」という言葉が最初に用いられたのは1822年にツンツによって編集された『ユダヤ学雑誌』という雑誌のタイトルにおいてである<sup>5</sup>。彼はその事実を踏まえながら、「古いユダヤの知恵」と「ユダヤ学」の違いをいくつかあげ、最終的にツンツの学問活動を次のように称賛している。「ユダヤ教の探究をその世間離れした一面性や教義的な窮屈さから解放し、学問的諸学科の水準へと高め、そして諸学問の全体に組み入れたことはレオポルト・ツンツの不朽の功績である」<sup>6</sup>。この引用からわかるように、エルボーゲンにとってユダヤ学以前の「古いユダヤの知恵」は「世間離れした一面性」や「教義的な窮屈さ」に囚われていたのであり、それに対してツンツのユダヤ学はドイツの大学で営まれていた諸学問と肩を並べ、「諸学問の全体」のなかに確固とした位置を占めた——占めるはずだった——ユダヤ教研究だったのである。

---

<sup>4</sup> ポーランド生まれ。プレスラウのラビ神学校で学び、1903年、ユダヤ学高等学院の創設に参加。ユダヤ教ならびにその礼拝の歴史に関する研究に従事し、ナチスによる迫害のためにニューヨークに移住。

<sup>5</sup> Ismar Elbogen, *Ein Jahrhundert Wissenschaft des Judenthums* (Berlin: Philo Verlag, 1922), 5.

<sup>6</sup> *Ibid.*, 6. 本論文では基本的にJudentum (Judenthum)は「ユダヤ教」と訳しておくが、この訳語ではJudentumがもっている広い意味が捉え切れていないことも認めなければならない。

本論文は冒頭で、ユダヤ学を暫定的に定義づけてから議論をはじめた。エルボーゲンのテキストを読むと、「ユダヤ学」という概念の正確な定義<sup>7</sup>はこの学問が誕生してから長きにわたって議論されてきた問題であることがわかる。「ユダヤ学の全領域——これは何を含み、そして何を除外するのか」<sup>8</sup>。彼はユダヤ学の定義がいまだ不十分であること、そしてツツンにはじまるユダヤ学がいよいよ学問の全体性を放棄し、小さな事業に専心していくことを見るにつけ、不満を募らせていった<sup>9</sup>。かくしてエルボーゲンはユダヤ学に関するみずからの考えを次のように披露するのであった。

もしユダヤ学が事実の出所や確定のもっとも慎重な歴史的・文献学的作業をも、みずからの課題の一部とみなすならば、ユダヤ学がその課題に従事しているのは、自己目的としてではなく、また過ぎ去った時代や死んだ文字の記念碑を復活させるためではなく、現在が築かれている土台を解明するためである。ユダヤ学の目的は生けるユダヤ教（das lebendige Judentum）であり、そうであり続ける。それはあらゆる光線が目指す焦点を形成しなければならず、素材と研究の多様性を統一的な絆に結びつける指導的思想でなければならない<sup>10</sup>。

彼にとってユダヤ学とは「発展の流れのなかにあり、社会学的・歴史的統一性であるところの生けるユダヤ教に関する学問」であり、「目的をもった学問」（eine Zweckwissenschaft）であった<sup>11</sup>。

---

<sup>7</sup> Ibid., 40.

<sup>8</sup> Ibid.

<sup>9</sup> David N. Myers “The Ideology of Wissenschaft des Judentums” in *History of Jewish Philosophy*. Edited by Daniel H. Frank and Oliver Leaman (London/New York: Routledge, 1997), 716. (デイビッド・N・マイアーズ「ユダヤ教のイデオロギー」佐藤貴史訳、『北海学園大学人文論集』第58号、2015年、114頁)。

<sup>10</sup> Elbogen, *Ein Jahrhundert Wissenschaft des Judentums*, 44.

エルボーゲンによるユダヤ学の定義の妥当性についてここで論じることはしない。重要な点は彼がユダヤ学の定義の不十分さを論じる過程で、ガイガーに言及していることである。彼は、こうしたユダヤ学の根本問題を論ずる箇所、ガイガーのユダヤ学を評価すると同時に批判しているものである。

エルボーゲンは、ガイガーの講義録「ユダヤ学序論」を「この主題に関する唯一の詳細な論述」<sup>12</sup>と呼んでいる。とはいえ、ガイガーによるユダヤ学の定義は揺らいでいるようにも見える。なぜなら、ガイガーは「ユダヤ学の厳密な定義を提示することは必要ない」<sup>13</sup>と書く一方で、次のようにユダヤ学を定義しているからである。「ユダヤ学は、ある特殊な領域のなかで活動していた精神的生（Geistesleben）がもっている独特な方向の考察であり、その領域はまさにユダヤ教（Judenthum）を築き、発展させ、広く知らしめ、現在にいたるまで活力をもってそれ〔ユダヤ教〕を育てているのである」<sup>14</sup>。

エルボーゲンは、このようなガイガーによるユダヤ学の定義を取り上げて、「狭すぎる」<sup>15</sup>と批判している。初期の世代に属するツント（1794年生まれ）やヴォルフ（1799年生まれ）のユダヤ学<sup>16</sup>と比べて、そのあとにやっ

---

<sup>11</sup> Ibid., 43.

<sup>12</sup> Ibid., 40.

<sup>13</sup> Abraham Geiger, "Allgemeine Einleitung in die Wissenschaft des Judenthums" in *Abraham Geigers Nachgelassene Schriften*, herausgegeben von Ludwig Geiger, zweiter Band (Berlin: Louis Gerschel Verlagsbuchhandlung, 1875), 39. 英語による抄訳が以下の研究書にある。*Abraham Geiger and Liberal Judaism. The Challenge of the Nineteenth Century*, compiled with a biographical introduction by Max Wiener, translated from the German by Ernst J. Schlochauer (Philadelphia: Jewish Publication Society of America, 1962).

<sup>14</sup> Ibid., 39.

<sup>15</sup> Elbogen, *Ein Jahrhundert Wissenschaft des Judentums*, 41.

て来たガイガー（1810年生まれ）のユダヤ学とユダヤ教理解は、エルボーゲン（エルボーゲン）の眼にはある種の逸脱として映ったのかもしれない。しかし、見方を変えればガイガー自身が異なる問題意識のもとで、彼独自のユダヤ学を構想したと理解することもできるはずである。なぜならエルボーゲン自身が、ガイガーのユダヤ学講義を「この主題に関する唯一の詳細な論述」と呼んでいたことは、ツンツやヴォルフのユダヤ学とは一線を画したガイガー独自のユダヤ学が構想されていたことにエルボーゲン自身が気づいていたとも考えられるからである。

## (2) 狭すぎるユダヤ学？ — ガイガー研究の現状

大きく見て、これまでのガイガー研究は〈当時のリベラルなプロテスタント神学者たちの反ユダヤ主義的偏見とそれに対するガイガーの批判を中心に据えた研究〉と〈ユダヤ教の指導者としてのガイガーの思想と実践に焦点を当てた研究〉という2つの方向に分けることができる。こうした研究状況のなかでも、前者の方向、とくにスザンナ・ヘッセル<sup>17</sup>による『アブ

---

<sup>16</sup> たとえばヴォルフは、次のようにユダヤ教 (Judenthum) を定義づけている。「ユダヤ学 (Wissenschaft des Judenthums) について語ろうとするならば、次のことが自明である。すなわち、ここでの Judenthum という語は、宗教、哲学、歴史、法制度、文学一般、市民生活およびあらゆる人間の事柄に関連しており、ユダヤ人の状況、特質、彼らが成し遂げたものすべてを示す総体概念 (Inbegriff) として、そのもっとも包括的な意味で用いられているのであり、ユダヤ人の宗教だけを意味するような、より限定された意味において用いられているのではない」。Immanuel Wolf, "Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums," *Zeitschrift für die Wissenschaft des Judenthums* (1822/1823), 1. (イマヌエル・ヴォルフ「ユダヤ学概念について (訳者解題と抄訳)」佐藤貴史 [訳], 『北海学園大学人文論集』第70号, 2021年, 135頁)。

<sup>17</sup> 20世紀の著名なユダヤ人哲学者アブラハム・ヨシュア・ヘッセル (Abraham Joshua Heschel, 1907-1972) の子どもであり、現在はダートマス大学でユダヤ思想を講じている。



ラハム・ガイガーとユダヤ人イエス』(*Abraham Geiger and the Jewish Jesus*, 1998) は今日のガイガー研究のなかで大きな影響力をいまなおもっている<sup>18</sup>。

ヘシエルによれば、「ガイガーはキリスト教のテキストを明確にユダヤ的視点による詳細な歴史的分析のもとにしたがえさせた最初のユダヤ人だった<sup>19</sup>。従来ユダヤ教とキリスト教の関係はつねにキリスト教の視線を通じてユダヤ教を見てきたものであったならば、ガイガーはこれまでの支配的な視線を反転させ、ユダヤ教の視線を通してキリスト教やイスラームのみならず、ヨーロッパ文化の歴史をも描こうとしたと言ってよい。ヘシエルはガイガーのようなユダヤ人歴史家の試みを「一つの反抗的努力」と呼び、「ガイガーの作品はキリスト教の知的ヘゲモニーに対して歴史叙述という道具の照準を合わせることで、植民地化された者の反乱を示している」とまで書いている<sup>20</sup>。

ユダヤ教はキリスト教が歴史の舞台に登場するための不可欠の基盤であり、イエスは端的にユダヤ人だった。ガイガーによれば、イエスの教えにユダヤ教的に新しいものは何もなかったのである。要するに、彼はユダヤ人としてのイエスの、もっと言えばファリサイ派の一員としてのイエスの姿を描き、イエスをユダヤ人の側に奪還しようとしたのであり、ヘシエルはガイガーの学問を「キリスト教をユダヤ教化しようとする努力」<sup>21</sup>だったとみなしている。

ヘシエルの研究は、当時のキリスト教神学——さらにはイスラーム研究

---

<sup>18</sup> 後者の研究は、Ken Koltun-Fromm, *Abraham Geiger's Liberal Judaism: Personal Meaning and Religious Authority* (Bloomington: Indiana University Press, 2006)に代表させることができる。

<sup>19</sup> Susannah Heschel, *Abraham Geiger and the Jewish Jesus* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), 2.

<sup>20</sup> Ibid.

<sup>21</sup> Ibid.

—との関係でガイガーの思想を解明しようとしている。これに対して、本発表の関心はガイガーのユダヤ学の構造や内実であり、発表者の見るところ、この方向の研究は十分になされているとは言い難い<sup>22</sup>。ここで先のガイガーのユダヤ学に対するエルボーゲンの両義的言及とは別に、もう一人注目すべき研究者を取り上げてみよう。マックス・ヴィーナー<sup>23</sup> (Max Wiener, 1882-1950) である。エルボーゲン同様、新しい研究に属しているとはまったく言えないが、発表者の主たる問題関心は過去の研究の読み直しにあると言ってもよい<sup>24</sup>。

ヴィーナーによれば、「実践的目的と理論的関心の融合」がユダヤ学を突き動かしていた「推進力」であったのであり、この両者の関心はガイガーのなかで明確な表現をえている<sup>25</sup>。ガイガーのユダヤ教理解は基本的に

---

<sup>22</sup> 本論文と近い問題関心を共有するのが Imke Stallmann, *Abraham Geigers Wissenschaftsverständnis. Eine Studie zur jüdischen Rezeption von Friedrich Schleiermachers Theologiebegriff* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013) である。しかし、現時点の判断では、ガイガーの思想における形而上学的側面にそれほど大きな関心が払われていないのではと感じている。

<sup>23</sup> ポーランド生まれ。大学や神学校で学んだのち、ベルリンのユダヤ学研究機関でエルボーゲンの学生になる。レオ・ベックとも親交があり、リベラルなユダヤ教の立場を代表するユダヤ人思想家。

<sup>24</sup> ヘシエルの研究は刺激的であり、その成果はいまだ乗り越えられていない。ただ、一つ気になるのは、彼女の問題関心自体が時代の学問的流行と密接な関係にありすぎるのではないかということである。「視線を反転させること」「ガイガーの作品はキリスト教の知的ヘゲモニーに対して歴史叙述という道具の照準を合わせることで、植民地化された者の反乱を示している」「反歴史」(counterhistory) などの言葉使いや解釈枠組みなどからも、そのことが窺える。Heschel, *Abraham Geiger and the Jewish Jesus*, 1, 14. 研究史は一つ思想史だと言えるのは、この意味においてである。

<sup>25</sup> Max Wiener, "Abraham Geiger's Conception of the "Science of Judaism", *Yivo Annual of Jewish Social Science*, Volume XI (1956/1957), 144.

「宗教的見方」に限定される傾向があり、その意味では、エルボーゲンが先に述べた「狭すぎる」という批判が共有されていると言えるかもしれない。しかし、同時にヴィーナーはガイガーのユダヤ学が「より限定された宗教的アプローチ」であることを認めながらも、次のような評価を下している。すなわち、「ユダヤ学の課題と方法に関する彼の解説」を読むと、「彼の歴史感覚がユダヤ教のより一層包括的で具体的な叙述を彼に描かせたこと」がわかるのである<sup>26</sup>。こうしてあらためて述べれば、本論文の目的は、エルボーゲンとヴィーナーの指摘や問題関心を引き継ぎながら、資料としては主に講義録、関心の焦点としては彼のユダヤ教ならびにその歴史の解釈を重視することで、ガイガーのユダヤ学の内実を考察する点にある。

## 2. ガイガーにおけるユダヤ学の構想 — 歴史と形而上学

### (1) ユダヤ学の目的, 区分, 定義 — 「精神的生」の理解

ガイガーは、1872年から74年にかけてユダヤ学高等学院 (Hochschule für die Wissenschaft des Judentums) でユダヤ学やユダヤ神学に関する講義をしている<sup>27</sup>。その講義録を読むと、彼のユダヤ学の構想の一端を確認

---

<sup>26</sup> Ibid., 145.

<sup>27</sup> ユダヤ学研究の論点として、ユダヤ学の制度的背景というテーマがある。伝統的にユダヤ教の知識はラビが占有していたが、近代以降はキリスト教神学と同様に、ユダヤ教もまた学術機関、とりわけ大学で研究されるべきだという考えが生じてきた。結果的にガイガーは大学でユダヤ教を教えることはできなかったが、ガイガーだけでなくツンツもまた大学のなかにユダヤ学の場所を創設することに尽力した。ただし、両者の考えが一致していたわけではない。たとえば、ツンツは「世俗化され歴史主義化するユダヤ学」に関心をもっていたが、ガイガーは「ユダヤ教改革のための学問的神学」の創設を求めた。Monika Richarz, *Der Eintritt der Juden in die akademischen Berufe. Jüdische Studenten und Akademiker in Deutschland 1678-1848* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1974), 192. 最近のガイガー研究としては以下のも

することができる。

ガイガーによれば、ユダヤ学の目的は「ユダヤ教を満ちし、その特有の生の力としてユダヤ教に内在する宗教思想的内実の十全な認識」<sup>28</sup>である。このような認識に到達するためには、「いかにしてその思想が現象世界に現れたのか」「いかにしてその思想が表現や言語にはっきり示されたのか」「いかにしてその思想が行為、つまり歴史のなかで説明されたのか」を考察する必要がある<sup>29</sup>。これらの問いを通じて、ユダヤ学はユダヤ教の思想的内実、言い換えれば「その哲学・宗教・道徳的確信」<sup>30</sup>を把握できるのである。したがって、ガイガーのユダヤ学は「言語学的部分」「歴史的、すなわち文学史・文化史的部分」「哲学・宗教的部分」という3つに区分に基づいて構想されていたことがわかるだろう<sup>31</sup>。ただし、ユダヤ学の講義録では3つ目の「哲学・宗教的部分」がまとまって論じられることはない。

先に次のようなガイガーによるユダヤ学の定義について紹介した。

ユダヤ学は、ある特殊な領域のなかで活動していた精神的生（Geistesleben）がもっている独特な方向の考察であり、その領域はまさにユダヤ教（Judentum）を築き、発展させ、広く知らしめ、現在にいたるまで活力をもってそれ〔ユダヤ教〕を育てているのである<sup>32</sup>。

---

のが有益である。Carsten L. Wilke, “Abraham Geigers Bildungsutopie einer jüdisch-theologischen Fakultät” in *Jüdische Existenz in der Moderne. Abraham Geiger und die Wissenschaft des Judentums*, herausgegeben von Christian Wiese, Walter Homolka, Thomas Brechenmacher (Berlin: De Gruyter, 2013).

<sup>28</sup> Geiger, “Allgemeine Einleitung in die Wissenschaft des Judentums” 35.

<sup>29</sup> Ibid.

<sup>30</sup> Ibid.

<sup>31</sup> Ibid.

<sup>32</sup> Ibid., 39. 傍点引用者。

上記で述べた「ユダヤ教を満たし、その特有の生の力としてユダヤ教に内在する宗教思想的内実」とは、この引用に基づいて解釈すれば「ある特殊な領域のなかで活動していた精神的生 (Geistesleben)」と言い換えることができるだろう。ガイガーによれば、ユダヤ教を成立させる特殊な領域が存在し、そこでは独特の傾向をもった「精神的生」が働いている。ユダヤ学は、まさにこの「精神的生」とその方向を考察する学問であり、「精神的生」は聖書を含めたユダヤ教そのものが生成する「ある特殊な領域」で活動している。興味深いことに、こうしたガイガーの定義は、かつてブーバーが述べた「原聖書的つまり聖書以前の聖書の雰囲気」、すなわち聖書を聖書として成立させる特殊な傾向をもった雰囲気とも通底するような全体と部分の解釈学を示唆しているだろう<sup>33</sup>。また、「精神的生 (Geistesleben)」がもっている独特な方向の考察の「方向」とは、ユダヤ教の歴史とその探究を意味しているはずである。その意味では、ユダヤ教そのものが生成する背後には精神的生が働く形而上学的領域が存在することが仮定されていると同時に、彼にとってユダヤ教はどこまでも歴史批判的方法の対象だったと考えることができるのである<sup>34</sup>。

## (2) ユダヤ学における歴史の意味 — 起源と発展

ガイガーのユダヤ学は「言語学的部分」「歴史的、すなわち文学史・文化史的部分」「哲学・宗教的部分」という3つの区分から構成されているが、

---

<sup>33</sup> Martin Buber, “Abraham der Seher” in *Werke Zweiter Band: Schriften zur Bibel* (München: Kösel-Verlag; Heidelberg: Verlag Lambert Schneider, 1964), 875. もちろん、ここで述べられているユダヤ教と聖書は別の概念なので、ガイガーとブーバーを安易につなげることに注意しなければならない。

<sup>34</sup> ガイガーは次のようにも書いている。「……その特有の精神的力はほとんどいつももっとも影響力の大きい世界史的な精神の流れのなかで、すなわち決定的な文化の発展の焦点のなかでみずからの働きを示したことで、このような特有の精神的力への関心が生じたのである」。

Geiger, “Allgemeine Einleitung in die Wissenschaft des Judenthums” 39-40.

彼は最初の2つの部分、すなわち言語と歴史に関して次のような対比を行っている。ガイガーによれば、言語は「民族の思想表現」であり、歴史よりも「若々しく、直接的」である<sup>35</sup>。さらに言語は「精神全体」<sup>36</sup>を覆っているとも書かれている。しかし、言語は「精神の都合のよい道具」<sup>37</sup>であり、やがて硬直化するという。これに対して、歴史は「固有の民族精神の外にあり、きわめて多くの他の諸要因に依存している」<sup>38</sup>。とはいえ、「まさに奮闘、発展、闘争、勝利あるいは敗北のなかで精神の力や無力が明示され、とりわけユダヤ教にとって、そのなかには精神的生の無尽蔵に豊かな展開と形成がある」<sup>39</sup>。さまざまな表現が用いられているが、これは端的に言えば歴史のなかでの精神の働きを示しており、ユダヤ教という「精神的生の無尽蔵に豊かな展開と形成」がガイガーのユダヤ学の研究対象である。

これらの記述に続いて、ガイガーはユダヤ学という学問を構成する Judenthum と Wissenschaft にいわゆる隔字体を用いながら、ユダヤ学と歴史あるいは歴史研究の関係を次のようにまとめている<sup>40</sup>。「ユダヤ学 (Wissenschaft des Judenthums) の本質的構成要素としての歴史は、言うまでもなく精神的行為の歴史でのみありうる」<sup>41</sup>。日本語訳ではわかりづらいが、下線を引いた Judenthum は隔字体で強調されており、後ろの「精神的行為の歴史」という表現を踏まえると、この Judenthum はユダヤ教と動的精神の関係を示唆しているはずである。また、この文章の少し先を読むと、Wissenschaft が隔字体で表現され、次のように言われている。「……ユダヤ学 (Wissenschaft des Judenthums) の構成要素として、歴史的の内実

---

<sup>35</sup> Ibid., 61.

<sup>36</sup> Ibid.

<sup>37</sup> Ibid.

<sup>38</sup> Ibid.

<sup>39</sup> Ibid.

<sup>40</sup> 英訳では隔字体での強調があることは示されていない。

<sup>41</sup> Ibid.

の扱いは歴史を総じて学問として認めるようなあらゆる原則にみずからをしたがわせなければならない」<sup>42</sup>。

これらの考察から次のことが言えるだろう。ガイガーのユダヤ学は精神的生としてのユダヤ教を歴史学的方法で考察する学問である。その場合、彼が重視するのは、対象としてのユダヤ教は「精神的歴史」という形をとり、それは「ユダヤ人の本質」(das Wesen der Juden)に属しているという点である<sup>43</sup>。さらにもう少し踏み込んで言えば、ガイガーはユダヤ教の歴史的考察をユダヤ教の歴史全体に基づいて2つの方向に向けて行おうとしている。

ガイガーにとって、「ユダヤ教の歴史は暗い太古の時代から直近の現在にまでいたる驚嘆すべき特異性を届けなければならない」<sup>44</sup>。このようなユダヤ教の全体的歴史のなかで、ガイガーのユダヤ学は、〈起源の探究〉と呼べる一つの方向を取ろうとする。すなわち、「[ユダヤ教の]生成の秘密」<sup>45</sup>を知りたいとする願望は、単なる好奇心に促されているのではない。そうではなく、「その発端の成長と発展のなかで、のちの発展全体は本質的にすでに準備教育を施されている」のであり、「研究者」はどんなに困難であっても、「原歴史的、すなわち前歴史的現象」(eine urgeschichtliche, also vorgeschichtliche Erscheinung) — 先の引用に引きつければ、「精神的生」としてのユダヤ教を成立させ、それが活動している特殊な領域 — の探究を避けることができないのである<sup>46</sup>。

もう一つの方向は〈発展の探究〉と呼べるだろう。ガイガーにとって、ユダヤ人の本質に属する「精神的歴史」は「世界形成的」<sup>47</sup>(weltgestaltend)

<sup>42</sup> Ibid., 62.

<sup>43</sup> Ibid., 61.

<sup>44</sup> Ibid., 63.

<sup>45</sup> Ibid.

<sup>46</sup> Ibid.

<sup>47</sup> Ibid., 61.

である。これは、発端に内在している「のちの発展全体」の行方を考察する探究方法である。しかもガイガーのユダヤ学にとってユダヤ教の発展は重要な解釈枠組みであるが、このような彼の発展的歴史観は、ユダヤ教の歴史に限定されていない。それはユダヤ教を越えて、キリスト教へ、そしてイスラームや近代哲学にまで、その射程を拡大しているのである。

次のような事実は消し去ることができない。すなわち、それ〔ユダヤ教〕は……古代の終りにキリスト教をおのれから生み出し、中世にはイスラームを生じさせ、そして本質的内実ではぐくまれながら、スピノザに手を加えることで、近代には哲学的観照の変形のきっかけとなった。このような世界的な力はそれ〔ユダヤ教〕のなかには残っていなかったが、ユダヤ教の精神はそれら〔キリスト教、イスラーム、近代〕のなかでは引き続きともに働いていた<sup>48</sup>。

「ユダヤ教の精神」すなわち「精神的生」はキリスト教とイスラームを生み出しただけではない。それは歴史を通じて、キリスト教とイスラームのなかでなお生きており、近代哲学にも影響を与えている。ガイガーのユダヤ学における〈発展の探究〉とは、この過程を歴史的に跡づけることだと考えることができるだろう<sup>49</sup>。

---

<sup>48</sup> Ibid., 40.

<sup>49</sup> ガイガーはプロテスタント神学者フェルディナント・クリスティアン・パウルの方法論から大きな影響を受けたとよく指摘される。たとえば、「キリスト教の原歴史（die Urgeschichte des Christentums）、すなわちキリスト教の成立と最初の発展を……批判的に研究することがわれわれの時代の偉大な課題であり、われわれの時代の普遍的関心と運動のもっとも奥にある核心からのみ生じる課題である」というパウルの言い方は、ガイガーのユダヤ学との類似性を感じさせるものである。Ferdinand Christian Baur, *Paulus, der Apostel Jesu Christi. Sein Leben und Wirken, seine Briefe und seine Lehre. ein Beitrag zu einer kritischen Geschichte des Urchristentums*, 1.



## おわりに — ユダヤ学の複数性

ガイガーのユダヤ学は、〈起源〉と〈発展〉という2つの方向性をもってユダヤ教の歴史的考察をしようとしていたことを最後に確認した。もちろん歴史的考察とはいえ、それはいわゆる実証主義とはかなり異なる歴史的考察の態度であり、形而上学的領域を背景にしたユダヤ教の「精神的生」をいかにして叙述するかという、彼独自の学問的努力に基づいた歴史的考察であった。

最後に一つ、今後の展望について述べておきたい。ユダヤ教の起源と発展を探究するガイガーのユダヤ学を解明するうえで、重要な役割を果たす概念はおそらく啓示である。ガイガーはユダヤ教の歴史を4つに分けたさい、聖書が完成する前の時代を「啓示の時代」<sup>50</sup>と呼んだ。その時代は「若々しくて、くすむことなく、そして束縛のない、内からやってくる創造の時代」<sup>51</sup>である。ユダヤ教の起源にある啓示、そして歴史のなかで発展し、受け継がれていく啓示をガイガーはいかにして理解可能なものとして取り出すのか<sup>52</sup>。

Theil (Osnabrück: Otto Zeller, 1968), 3. ガイガーとパウルの関係に関しては Heschel, *Abraham Geiger and the Jewish Jesus* がもっとも基本的かつ重要な研究書である。また、以下の拙論も参照されたい。佐藤貴史「解釈と発展 — アブラハム・ガイガーとプロテスタント神学の関係をめぐる研究史的考察」(『北海学園大学人文論集』第72号, 2022年3月)。佐藤貴史「19世紀プロテスタント神学における歴史叙述と教会史 — フェルディナント・クリスティアン・パウエル試論」(『北海学園大学人文論集』第74号, 2023年3月)。

<sup>50</sup> Geiger, “Allgemeine Einleitung in die Wissenschaft des Judenthums” 63.

<sup>51</sup> Ibid.

<sup>52</sup> モーゼス・メンデルスゾーンにはじまる近代ドイツ・ユダヤ思想史において発展的歴史観がどのように受容されたかは、19世紀ユダヤ学者の啓示理解を考えるさいに非常に重要な論点を形成することになる。たとえば、エルンスト・カッシーラーは『啓蒙主義の哲学』のなかで、メンデルスゾーンと

前半で述べたように、エルボーゲンはガイガーのユダヤ学を「狭すぎる」と批判したが、ヴィーナーはガイガーの「歴史感覚」の独自性を指摘した。いずれの評価にせよ、彼のユダヤ教理解がキリスト教、イスラーム、そして近代哲学にまで及んでいるのであれば、ツンツやヴォルフとは異なるユダヤ学の構想——ユダヤ学を評価する基準——がそこにはあったはずであり、ユダヤ学はつねに *Wissenschaft des Judentums* ではなく、*Wissenschaften des Judentums* という複数性の視点のもとで理解されなければならないのである<sup>53</sup>。

\*本研究は JSPS 科研費 21K00092 の助成を受けたものです。

---

レッシングの関係について興味深く論じている。宗教の違いはあれ、両者のあいだには真の友情があった。しかし、メンデルスゾーンはレッシングのいわゆる人類の教育なる思想だけではどうしても受け入れることができなかった。メンデルスゾーンにとって、「人類最高の目標の実現が歴史のような、あらゆる種類の不合理と矛盾、絶え間ない動揺と誤謬の可能性を包蔵している案内人に委ねられるという考えは、最後まで想像できないものであった」。エルンスト・カッシーラー『啓蒙主義の哲学 上』（中野好之 [訳]、筑摩書房〔ちくま学芸文庫〕、2003年）、314頁。また、以下の研究も参照されたい。George Y. Kohler, ““The Pattern for Jewish Reformation”: The Impact of Lessing on Nineteenth-Century German Jewish Religious Thought” *Harvard Theological Review* (2020), Volume 113, Issue 2.

<sup>53</sup> ユダヤ学の複数性という視点は以下の研究から重大な示唆を得た。Kerstin von der Krone and Mirjam Thulin, “Wissenschaft in Context: A Research Essay on the *Wissenschaft des Judentums*,” *Leo Baeck Institute Year Book*, Vol. 58, 2013.

